

東京 IPO 特別コラム

2020年11月5日 Vol.168

米大統領選後の株式相場と IPO 市場

11月3日に投票が終わった米大統領選の結果がまだ見えてこない。郵便投票による混乱が見られる中でトランプ大統領の提訴が決着を先延ばし。最終的な決着が先送りされる中で株式相場は日米とも意外にも堅調な推移が見られる。選挙の決着は先送りされてはいるが、どうやら親中派のバイデン優勢が明確になってきたことで、方向性が多少でも見えてきたというのが選挙前には上値が重かった株式相場の直近の急上昇につながっていると推察される。

この選挙戦を前に株式相場は様子見を決め込み調整の動きを見せていたが、投票日直前になってNYダウは2日間で1000ドルもの急騰を演じ、開票後も上昇一時は2万8000ドル台に乗せてきた。決着を見ない中なので、これがトランプ再選を期待したものかバイデン勝利を期待したものなのかは判らないが、結果を待たずに株価が上昇した流れは好需給の下で手控えられてきた投資家のポジティブな投資行動が見切り発車的に出てきたという印象が持てる。米国株の勢いに連動して日経平均も一気に過去の高値圏に踊り出てきた。多くの市場関係者が想定している2万4000円台乗せを目前にしている状況が見られる。前回の大統領選では予想外のトランプ当選で一旦下振れを演じたが、今回は果たしてどのような波乱が待っているのか。米国経済にとっては増税政策、環境重視のバイデンより減税政策を掲げるトランプ再選が好ましいことは言うまでもなく、新たな4年間で想定される株式相場の上昇トレンドを継続させる原動力となってもおかしくない。とは言え、株式相場は摩訶不思議な動きをしがちで迂闊に先読みはできない。新型コロナの感染拡大防止と経済再生、雇用回復という二律背反となる難しい政策のかじ取りが仮にバイデン大統領となったとしても簡単ではないことは言うまでもないがいずれにしても再び経済の回復に向けた積極的な施策への期待感がこの先も続くことになろう。

米国株に連動する日本株ではあるが、このところの日本株はマザーズ銘柄に主導された格好でこれまでにない潮流が見られたものの、その物色人気は行き過ぎの咎めも出て一旦穏健なものとなってきた。10月後半のIPOはマザーズ銘柄(カラダノート、プレミアアンチエイジング、さくらさくプラス、Retty)だったが、概ね順調な初値形成が見られたが、その後は各銘柄ともに波乱の動きが見られる。好需給によって初値が高くなり過ぎた場合の咎めが出てしばらくは調整を余儀なくされるとしても中長期的な成長期待やテーマ性を持つ新規上場銘柄への活躍期待は継続するだろう。4年に1回の米大統領選の混乱の下で、全体相場もややイレギュラーに反映され、11月後半に予定されているIPOにもバトンタッチされようとしている。この後のマザーズIPOは19日のアララ(4015・M)まで予定はなく、マザーズ銘柄はしばしの間、お休みムード。物色気運の高まりは11月後半のIPO相場がスタートするタイミングからとなりそうだ。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)